

## 論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Association of cleft lip and palate on mother-to-infant bonding: a cross-sectional study in the Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル: 口唇口蓋裂と母親の対児愛着との関連について

ユニットセンター(UC)等名: 宮城UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BMC Pediatrics

年: 2019 月: 12 巻: 19 頁: 505

筆頭著者名: 土谷 忍

所属UC名: 宮城UC

目的: 口唇口蓋裂はもっとも多い外表先天異常であり、口唇口蓋裂児の出産は産後の母親の心理状態に対しネガティブな影響を与えることが報告されている。しかしながら、口唇口蓋裂児の出生が母親の対児愛着へ与える影響については十分に明らかになっていない。本研究では大規模出生コホート調査のデータを用いてこの関連を調べた。

方法: 1歳時全固定データを用い、選択基準に合致した79,140組の母親とその子どもを対象とした。母親の対児愛着の評価には赤ちゃんへの気持ち質問表(MIBS-J)を使用し、カットオフ値(4/5)を用いてボンディング障害と評価した。年齢と出産経験による層別化を行った後、共変量として、喫煙と飲酒習慣、授乳形態、子どもの性別、母親のK6を用い、多重ロジスティック回帰分析により検討を行った。

結果: 79,140組の親子のうち、211組に口唇口蓋裂が認められた。口唇口蓋裂児出生とボンディング障害との関連については、全体では有意ではなかった。その一方で、35歳以上の母親でかつ経産婦においてのみ口唇口蓋裂出生とボンディング障害の間に相関が認められた。

考察: (研究の限界を含める) 口唇口蓋裂児の出産が母親のボンディング形成に与える影響を大規模なコホート調査データを用いて示した。35歳以上の経産婦においてのみ口唇口蓋裂児の出生と母親のボンディング障害に有意な相関が認められたため、ボンディング障害のスクリーニングが口唇口蓋裂児のケアにおいて重要であることが示唆された。本研究の限界として、ボンディングの評価が1歳時のみであるため、経時的な評価が必要であることと、ボンディング形成に影響する出生前診断の有無についての情報が含まれていないことが挙げられる。

結論: 口唇口蓋裂児出生とボンディング障害との関連については、全体では有意ではなかったが、35歳以上の経産婦でのみ有意な相関が認められた。子どもの発達や不適切な養育に繋がる母親のボンディング障害に対する対応が口唇口蓋裂児の包括的なケアに必要である。